

平成 24 年度 教員免許状更新講習・シラバス

講座 番号	4	講座名	日本史（歴史）教育に地域史研究の成果をどう活かすか（その2）					
担当講師		開催地	時間数	日程	主な受講対象者	受講人数	講習形式	試験方法
松井 輝昭		広島キャンパス	6 時間	7 月 29 日	中学校社会科・ 高等学校地歴科 教諭	40 人 (最少開催 人数 3 人)	講義	筆記
到達目標		日本史（歴史）教育の素材となる地域史研究（厳島神社史）の最新の知見を理解している。						

【講座の概要】

身近な地域の歴史や文化遺産の学習を通して歴史への関心を高めることを求めている学習指導要領に対応するため、広島県地域を対象とする最新の研究成果（厳島神社を中心とする地域文化史研究）を紹介しながら、新たな知見を日本史（社会科）の授業の展開にどのように活かしていくのかを考える。

【講座の内容】

講義 1：安芸国一宮厳島神社と平清盛

厳島神社の歴史を明らかにしようとすると、まず平清盛の亡霊と対峙することが必要になる。厳島神社は平清盛時代以前に安芸国一宮となっており、その神事・祭礼は国衙の官人とともに営まれていた。なお、この国衙祭祀が営まれたのは、厳島の内宮ではなく対岸の外宮であった。国衙祭祀の伝統は今日もかつての外宮（地御前神社）で生きている。しかし、平清盛が厚い崇敬を寄せるようになり、「平家納経」などの珍宝を奉納したのは、外宮ではなく厳島にある内宮であった。内宮と外宮のこのような相違点に目配りをしながら、平清盛の厳島神社信仰の背景とその特色について考える。

講義 2：厳島神社の秘宝と宝蔵

厳島神社には国宝の「平家納経」を始めとして、平安時代末期以来の多くの秘宝が伝わる。ところが、これ以前に奉納されたと思われる宝物の場合、残念ながらたったの 1 点も今日に伝えられていない。このような大きな違いが生まれた主たる要因は、神物の保管庫として宝蔵が作られていたか否かにある。平安時代末期に宝蔵に籠め置かれた神物や文書の類は、その多くが今日も散逸・焼失することなく奇跡的に伝えられている。宝蔵に納められた神物などを厳格に管理・保管するため、遅くとも鎌倉時代中頃には毎年七夕の日に「虫払い」を行うようになっていた。戦国時代中頃には寄進した物を宝蔵に籠め置くことを望む人々が増えてきた。永世の保管庫と位置付けられていた宝蔵の機能に注目し、これが厳島神社の歴史や文化のうえで果たした役割について考える。

講義 3：厳島神社の戦国ルネサンス

戦国時代は厳島神社の歴史のうえで、いわゆるルネサンス期に当たるといえる。ルネサンス期とは古い文化の再興だけでなく、あとに続く新しい文化を創造する時代という意味である。厳島神社の四脚の大鳥居の形式は、戦国時代に大内・毛利氏が再建した以降のものである。古式を留める舞楽も戦国時代に改めて四天王寺から移されたものである。江戸時代に厳島神社最大の祭りに成長した管絃祭も、戦国時代から厳島の町衆を巻き込み営まれるようになったものである。厳島神社の神事・祭礼で戦国時代にまで遡ることができるものは少なくない。厳島神社にとって戦国時代とはどのような時代であったのか、その名残といえるものがなぜ今日まで続いているのかを考える。

講義 4：厳島神社の神仏習合と神仏分離

今日の厳島神社は明治初年の神仏分離で破壊されたのちの姿を伝える。明治新政府は明治初年に神社から仏教的要素を排除することを命じたため、厳島神社の仏典や仏堂の多くが破却・焼却の憂き目にあった。同神社の神事・祭礼に加わっていた僧侶も追放されたので、彼らが参加していた神事・祭礼の多くは消滅か変容を余儀なくされた。しかし、宝蔵に置かれていた「平家納経」などの経典、仏堂である千畳閣・五重塔・多宝塔は、仏教的なものであるのかにかかわらず破却を免れた。このような例外的な措置が採られた理由を含め、厳島神社にとって神仏分離とは何であったのかを考える。また、その前提としての神仏習合の意味をもあわせて検討する。

【備考】試験の際には講義資料などの持込を認めます。

注) 予備日は 8 月 5 日（日）とします。